



『発心集』の仏法と王法(2):  
聖徳太子・行基・役行者の不在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-09-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 宗博 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005085">https://doi.org/10.24729/00005085</a>

# 『発心集』の仏法と王法（2）

——聖徳太子・行基・役行者の不在——

田中宗博

はじめに

本稿は、本誌前号掲載の拙稿Ⅱ『発心集』の仏法と王法（1）——巻頭遁世者説話群の意味するもの——を承けるものである。前稿末尾で指摘しておいたように、『発心集』には、聖徳太子・行基・役行者が登場する説話が見られない。このことは、『発心集』の（仏法）観を考える際に、幾分かの手掛かりとなるように思える。事態は『今昔物語集』の場合と比較すると、理解しやすくなるだろう。周知のように『今昔』は、本朝仏法部の冒頭を、この三人の説話で以て構築している。前田雅之氏はそれを「日本仏法の創始」「民間仏法の創始」「山岳仏法の創始」を担うものとし、三人の関係を「日本の仏法の原基的構造」を表わすものと評されている。<sup>1)</sup>ところが『発心集』は、この「本朝独自の」「仏法の原基的構造」に、ほとんど何の関心も示さず

とはしていないのである。

なお『今昔物語集』は、この三人の説話に続けて、本朝への仏法伝来譚や寺院草創譚を類聚し、我が国における仏法繁昌の次第を、諸宗・諸大寺の隆盛で以て表現しようとしている。だが『発心集』は、そのような諸宗の宗祖や宗門の起源とか、寺院草創の縁起などといった事象についても、大した関心を示してはいない。むしろ、前稿で指摘したように、巻頭に遁世者の境界離脱譚を類聚し、遁世者を讃仰する一方、南都仏教・天台山門・天台寺門・真言密教を逐次相対化してみせてもいる。そのようにして開かれる説話世界は、『今昔』の志向するところとは、自ずと懸隔のあるものであったようだ。

実際、『発心集』が肯定的に描く遁世者達は、「社会的存在としての仏教、つまり現実の寺社勢力」としての（仏法）を厭離し、遠国流浪あるいは山林隠棲を選んだ人々であった。また貴

族道心譚において、主人公達が厭離の対象とするものは、摂閥制最盛期の時代相であったり、院政期の複雑な政治状況であったりするのだが、いずれにせよそれは「政治権力あるいは具体的な政治勢力」としての〈王法〉そのものに他ならない。これを要するに、『発心集』で讃仰されているのは、〈仏法〉〈王法〉の価値を相対化し、その規制の埒外への脱出を志向した人々であったと言える。ここに、『今昔物語集』の構想と、『発心集』の説話世界との異同・違和は、必然のものとして立ち現れることとなる。単純に話材や話柄だけを見ると、源大夫説話をはじめ寂心・寂照の説話等々と、少なからぬものを共有しつつ、『今昔』と『発心集』の間には、かなりの径庭があったようだ。以下、このような展望の下に考察を進めるにあたって、まずは聖徳太子・行基・役行者の不在という事実を確認し、その意味を問うことから始めたい。

## 一

聖徳太子が、本朝仏法史の始原に位置づけられる存在であったことは、今さら贅言を要すまい。『日本霊異記』『日本往生極楽記』『三宝絵』『法華験記』の構成は、そのことを何よりも明らかに証するものであった。『今昔物語集』もまた、その系譜を

承け、本朝部卷第十一を「聖徳太子於此朝始弘仏法語第一」で始めている。ここで太子が〈本朝仏法の祖〉として遇されていることは、天竺部卷頭の釈尊説話との対応を確認するまでもなく、もはや自明のことと言ってよい。さらにこれを進めて、太子が〈仏法と王権・国家相方に跨がる二重存在として、あるいは、三国意識に対峙する自国意識の根源〉とされているという指摘も、従うべき理解であるように思える。

ところが『発心集』の場合はどうか。『今昔物語集』のみならず、右に掲げた二連の先行説話集や同時代の諸書と比べても、聖徳太子への関心の低さには、何か際立ったものが感じられる。事実『発心集』には、聖徳太子本人が登場する説話が一つもない。もちろん、語る機会がまったくなかったとは考え難い。例えば、よく知られた〈片岡山飢人説話〉などは、何度でも持ち出す機会があったはずだ。また、兼ねて死期を予知したという伝承や、臨終時の莊嚴・奇瑞の様子なども、往生人の行状を伝えることの多い『発心集』であれば、言及する機会は少なからなかったように思える。だが、事実として『発心集』全篇に、聖徳太子の影を見ることは、ほぼ完全に叶わない。

唯一「太子」の語が見えるのは、巻第七の第五話「太子御墓覚能上人、好管弦事」である。それとて、起筆部に「太子ノ

御墓ニ、覺能ト云聖有ケリ」とあるだけで、主人公の居所紹介以上の情報が示されるわけではない。この「御墓」(『磯長墓』)については、古くから御廟寺として叡福寺が営まれていたことが知られている。覺能もこの寺を活動の拠点としていたと推測されるが、彼のような「聖」「上人」が、ここで何を勤めとしていたのか。事は、中世太子信仰の一結節点<sub>II</sub>叡福寺の実情説明とも関わることゆえ、まことにゆかしい限りなのだが、その委細が語られることはない。編者の関心は、ひとえに「管弦モ、浄土ノ業ト信ズル人ノ為ニハ、往生ノ業トナレリ」という結論に集約される。実際、覺能なる人物について語られるのは、管弦への偏愛と、それを機縁とする往生の事実であつて、それは数奇者往生説話の範囲を出るものではない。

ただ説話末に、覺能の死後「四十九日ト云ニ、其身イツチトモナク失テ、見ヘズナリニケリ」とある点には、注意を払つておきたい。これは明らかに「尸解仙」を想起させる記事であり、ここに一話の中で、聖徳太子と尸解の要素が出揃ふこととなる。だが、この絶好の機会においてなお、「片岡山飢人説話」が言及されることはない。そもそも「太子ノ御墓」に暮らす聖が、往生の後に尸解を遂げたという伝承には、それ自体、太子信仰の投影を予想させるに十分なものがある。だが『発心集』は、そ

のような隠れた文脈を顕在化することに、まったく意を用いた形跡がない。どうやら編者の意識は、覺能説話の「場」<sub>II</sub>「太子ノ御墓」の意義や、説話生成の背景に向けられることはなかつたらしい。

## 二

聖徳太子への関心が希薄であつたことは、四天王寺関係説話からも窺える。例えば巻第一第十話「天王寺聖、隱徳ノ事 付乞食聖ノ事」は、市中の隱徳聖について語る一段である。このうち「近比、天王寺ニ聖有ケリ」と紹介され、その言種から「瑠璃」と通称される人物は、「物グレイ」と「ソシリヤシメ」られていた。ところが、その実像は天台法門の奥旨に通じた碩学であり、徳が顕れた後には「権者」とまで尊崇されるが、「加様二人ニ知ラレヌル事ヲウルサク」思つて失跡し、人知れず往生を遂げていたという。まさに、『摩訶止観』の勸説する隱徳のための佯狂を、地で行つた親のある説話であるが、一方でこの話は『日本靈異記』以来の「隱身の聖」説話の系譜を引くものである。

この聖は「布ノツヅリ、紙ギヌナムドノ、云ハカリナク、ユ、シゲニヤレハラメキタル」を着ていたと描かれる。また「布袋

ノキタナゲナルニ、コヒ集メタル物ヲヒトツニ取入テ、アリキアリキ是ヲ食<sup>レ</sup>い、童部達が「イクラトモナク笑ヒアナツ」つていたともいう。この汚穢にまみれた外装の描写や、子供達の無遠慮な嘲弄の記事は、賤視され排除される人物の中にこそ、聖なる存在が潜むという不思議を、鮮明に描くためのものとしてある。まさに「隱身の聖」の話型に相応しい叙述と言えよう。類例は巻第一第三話「平等供奉、離<sup>レ</sup>山<sup>ヲ</sup>趣<sup>ニ</sup>異州<sup>ニ</sup>事」などにも指摘できるが、ここではもう一つの四天王寺関係説話、巻第七第十二話「心戒上人、不<sup>レ</sup>留<sup>レ</sup>跡<sup>ヲ</sup>事」との関係に注意したい。

主人公心戒は、「俗姓ハ、花園殿ノ御末トカヤ。八嶋ノオトゞノ子ニシテ、宗親トテ、阿波ノ守ニナサレタリシ」とあるように、平家に繋がる人物であったが、「平家ホロビテ、世ノ中目前ニ跡カタナク」なった状況下、高野聖の境涯に身を投じる。その後、入宋経験や諸国流浪の果てに、「人ニモアラズ、瘦クロミタル」姿で、「紙ギヌノキタナゲニハラハラト破タル」を着て、「童部アマタ、後ニタテ、物クルイト笑ノシル」のを引き連れて登場する。その来訪を受けて、聖の行状の目撃者となったのが、「天王寺ニ理円坊トテ住給」と紹介される心戒の妹であった。この兄妹再会の舞台は、理円坊の住む四天王寺界限とみてよい。この話と、巻第一第十話の「瑠璃」聖の説話とは、その深層で

根を共有するものと考えられる。

このような説話が、四天王寺を「場」として語られたのは、実際にこの寺の界限が、賤民や癩者といった「制外者」の集まる「一種のアジール」であつたという事実が、関与していたと思われる。周知のように、聖徳太子の草創にかかる仏法初発の地<sup>④</sup>四天王寺は、太子信仰の隆盛のもと、王侯貴顕と衆庶・被差別民が交錯する境界領域的な「場」であり続けた。このような四天王寺の「場」としての性格は、聖と俗・貴と賤・浄と穢とが渾然一体化する中から、「権者」が顕現すると語る「隱身の聖」説話に、まことに相応しいものがあつた。そのことは、『発心集』編者にとつても、十分に了解範囲内にあつたに違いない。ところがこの両話のどこにも、話の舞台が他ならぬ四天王寺であることに、格段に顧慮した物言いを認めることはできない。

このことは、多少とも不自然な観がするし、もう少し立ち入った言及が欲しいところでもある。特に「瑠璃」聖の説話の場合、乞食に見紛う「権者」との邂逅という点でいうなら、これまた〈片岡山飢人説話〉への回路が開けていたはずだ。また「心戒」説話についても、「建礼門院二八条殿ト聞ヘシ」女性（妹）が天王寺を居所とするに至つた経緯を、語ることもできたのではないか。そもそも平氏滅亡後の時代相の中で、敗者に繋がる

女人がこの地に身を寄せたということは、それ自体が四天王寺という（場）のアジール性を物語るものであつたに違いない。もし、この間の事情を丁寧に表示することができれば、一話の中で四天王寺の含意するところは、もつと大きなものとなり得ただろう。

さて、四天王寺関係説話としてはもう一例、巻第三第六話「或女房、参二天王寺ニ入レ海ニ事」がある。こちらは、娘を亡くした女房が、難波の海に入水往生を遂げたという話である。捨身の志を胸中に秘め、都から下向した女房は、天王寺に辿り着き「日毎ニ堂ニマイリテ、ヲガミメグ」り、「一心ニ念仏ヲ申」し、布施を「御舍利ニ奉」つたりしたという。このあたりの記述は、「鳥羽院ノ御時」とされる説話当時の、参詣者の動静が窺えて興味深い。これ以上の情報が示されるわけではない。

結局、この女房は「天王寺西門ぎわの岸から入水すべく乗船して行く」こととなるが、当時、寺の鳥居には「当極楽東門中心」とあつたことが知られている。この銘文について『今昔物語集』は、太子自らが寺の「西門」に書いたものとし、さらに「是ニ依テ、諸人彼ノ西門ニシテ弥陀ノ念仏ヲ唱フ。于今不絶シテ、不参又人無シ」と特記する。史実の詮索は措くとしても、四天王寺近隣の地に集まる極楽願生者達の心に、ほぼ自明の

前提として、聖徳太子への結縁意識があつたことは、このような『今昔』の記事からも、十分に窺うことができよう。ところが、ここでもなお『発心集』は、聖徳太子について何ら言及するところがない。西門の彼方の難波の海に沈む夕陽を眺め、極楽の荘厳を観じて往生を期す人々は、同時に太子信仰に繋がる人々でもあつたはずだ。本話もまた、そのような人々の意識に支えられ、生成・伝承された捨身往生譚であつたに違いないが、それを顕在化させる方向での叙述は、遂ぞ試みられなかつたのである。

以上にみるように『発心集』は、聖徳太子の御廟寺であつた叡福寺はもとより、太子信仰の一大結節点であつた四天王寺を（場）とする説話においてすら、太子への関心を表立つて示すことはない。それは、説話レベルでの援用・挿入を行わないというだけではなく、例えば「上宮太子ノ御建立、佛法最初ノ四天王寺」（雑談集）とか「佛法最初の霊地」（平家物語）などといった、半ば定型句化した常套表現が、本文に添加されることとさえないということでもある。このことは、やはり記憶に留めておくべきだろう。中古・中世の説話集の多くが、機をとらえ折りをみて聖徳太子に言及しようとする中で、これは『発心集』の有意な特徴の一つと言えるのではないか。

どうやら『発心集』編者にとつて、速く守屋との合戦にまで遡る寺院縁起的叙述は、ほぼ関心の埒外にあつたらしい。また、太子草創の昔に思いを馳せ、「此ノ天王寺ハ、必ズ人可參キ寺也。聖徳太子ノ正ク仏法ヲ伝ヘムガ為ニ、此ノ国ニ生レ給テ、専ラ願ヲ発テ造リ給ヘル寺也」などと、ことさらに強調・教示する立場からも遠かつたようだ。本朝における仏法の繁昌を、寺の創立とその後の繁栄の確認を通して語ろうという構想は、『今昔物語集』の〈仏法〉観にはあつても、『発心集』とは縁遠いものであつたようだ。聖徳太子への関心の希薄さも、このような〈仏法〉観との関わりからも、押さえておく必要があるかと思ふ。

## 三

さて、『発心集』における不在が問題となるのは、聖徳太子だけではない。『今昔物語集』本朝部冒頭に配された三人のうち、残る行基と役行者についても『発心集』はまったく語るところがないのである。これもまた、多少とも奇妙な現象のように思えてくる。とりわけ、行基のように官大寺に属さず、民衆教化や社会的作善に遊化した人物の伝承は、ときに太子説話以上に『発心集』に適した話柄となり得たのではないか。しかし、

実際に行基本人が登場する説話は一つも採られていないし、派的・付加的に名前が言及されることもない。

もちろん、行基について語る機会が多々あつたはずで、聖徳太子と四天王寺の關係にかけて言うなら、東大寺関連説話などがそれに該当するだろう。具体的に言うと、巻第二二話「禪林寺永観律師ノ事」には、白河院の信頼を受けた永観が東大寺を修造した話が採られている。さらに巻第七の第十話「阿闍梨実印、大仏供養ノ時、滅罪ノ事」と第十三話「斎所権介成清ノ子、住高野ノ事」では、二度にわたり近時の「東大寺ノ大仏供養」が語られ、田舎人の参集ぶりや「勸進ノ聖」までが言挙げされている。だが、これらの説話についても、天平の昔の大仏開眼供養時に「勸進」を果たした行基のことが連想されたり、派生的に話題とされたりすることは一切ない。

行基についても、聖徳太子の場合同様『日本霊異記』以下、依るべき資料に事欠かなかつたはずだ。実際、『発心集』と踵を接して成立した『古事談』などは、その巻第三「僧行」篇を東大寺関連説話で始め、第三話以下三話連続で行基に説き及んでいる。また、仮に『発心集』編者が鴨長明であることを前提に言うなら、『奥義抄』『古來風体抄』等の歌書が記すところの、行基の前世を語るいわゆる〈真福田丸説話〉に触れていたこと

も、十分に予想される。和歌に関わる伝承の世界からも、行基説話を引き出す回路は開かれていたはずなのだ。

それは例えば、『宝物集』なども引く「百さかややそさかそへて給ひてしちぶさのむくひけふぞ我する」という行基伝承歌についても同断である。この歌など、母の愛を主要モチーフとする巻第五の第十四話「勤操、憐<sup>レ</sup>榮好<sup>ク</sup>事」や第十五話「正算僧都ノ母、為<sup>レ</sup>子ノ志深事」、あるいは恵心の母を語る巻第七第九話「恵心僧都、随<sup>レ</sup>母ノ心ニ遁世ノ事」あたりで採り上げ、行基説話を語り出す契機にしても良さそうに思えるが、そうはなっていない。これらの事実から判断する限り、『発心集』編者はやはり行基についても、機会をとらえて積極的に語っておこうといった熱意は、持ちあわせていなかったようだ。

これを要するに、太子信仰に疎遠な態度を見せた編者は、行基を（菩薩）と敬慕・讃仰する伝統とも、近い関係にはなかったということになる。行基の説話は、諸々の仏教説話集に記録されたもの以外にも、その活動拠点となった摂河泉地域に、地着きの伝承として存したことが確実視されるが、『発心集』がその種の説話を伝えることはない。この間の事情は、役優婆塞についてみても、共通するようだ。役行者本人の登場する説話はないし、行者の草創が伝えられる霊場に即して、その事跡や

名前が語られることもない。

もとより『発心集』編者が、役行者のような山林修行者に対して、冷淡・無関心であったとは考え難い。実際、巻第四冒頭には、第一話「三昧座主ノ弟子、得法華経驗ノ事」・第二話「淨藏貴所、飛<sup>レ</sup>鉢<sup>ク</sup>事」と、二話連続で人跡絶えた山中に居す験力絶倫の持経仙が登場し、それぞれ讃仰の対象とされてもいる。しかも、第一話の方は「熊野ヨリ大峯ニ入テ、ミ嶽へ出ル間ニ道ヲフミタガヘテ」とあるように、空間的にも役行者の活動圏と重なる地が、説話の（場）となっているのだ。それでもなお、彼ら山林修行者の始原に立つ役行者について、ただの一言も言及されることはない。

さらに巻第八にまで眼を移すと、第十話「於<sup>テ</sup>金峯山ニ犯<sup>レ</sup>妻<sup>ク</sup>者、経<sup>テ</sup>年<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>盲<sup>ト</sup>事」には、「御嶽」へ詣でた夫婦が「礼堂」で姦合の不浄を犯し、嚴罰を被ったという現報譚が語られている。この話で「金剛蔵王」は、一旦は夫婦の過失を許すも、後日の神意を軽んじた放言に嚴罰を下し、柔和・憤怒の両面性を見せる。だが、その「金剛蔵王」が「此ノ優婆塞ノ行出シ奉リ給ヘル」<sup>(18)</sup>神格であったことを、『発心集』は語ろうとはしていない。もし仮に、この点を語末評論部などで語っておいたならば、本話の伝える際やかな悪報の事実は、役行者開創以来の山岳仏



教の厳存を、金剛蔵王の靈威の確認を通して、しっかりと示すものとなり得たはずである。

だが事実として『発心集』は、金峯山や金剛蔵王にふれる説話ですら、まったく役行者に説き及ぶことがない。編者は、金峯山の〈場〉としての意味を、始原に遡って明示するといったような志向は、持ちあわせていなかったらしい。そのことは、四天王寺関係説話における〈場〉の持つ意味を、聖徳太子の草創に遡求し太子信仰の文脈の中で語ろうとしなかったことと、正しく対応している。

#### 四

以上、これらの事実を勘案すると、『発心集』における聖徳太子・行基・役行者の不在については、単に編者の関心の有無といった程度の説明だけでは、とても済ますことができなくなるだろう。どうやら、根はもつと深いところにあるようだ。そもそも『発心集』の構想には、「日本仏法の創始」「民間仏教の創始」「山岳仏教の創始」を担う三人を以て、「日本の仏法の原基的構造」とする『今昔物語集』の構想とは、明らかに異質なものがあったと考えるべきだろう。

それが何であるかは、既に前稿での考察が、多少なりとも解

答になっているかと思う。すなわち『発心集』は、聖徳太子でも行基でも役行者でもなく、玄奘を説話世界の巻頭に置いている。続けて、平燈・千観・増賀・南筑紫と並ぶ小説話群は、遁世者達の歴史叙述を志向するとともに、南都・天台山門・天台寺門・真言の仏法の価値をそれぞれ相対化し、以て本朝仏法史の裏を行くかの観がある。一方、この巻頭説話群で讃仰される人物の中で、ただ一人飛び抜けて古い時代の玄奘が、いわば〈境界離脱者の祖〉と位置付けられていることは、見やすい道理でもある。このことを、『今昔物語集』を視野に入れて鳥瞰的に展望すると、『発心集』所期の構想は、『今昔』の提示する三つの「創始」に加えて、本朝における「遁世者仏教の創始」あるいは「隠者仏教の創始」という一項を、新たに設けようとするものであったと評することもできるだろう。

さて、聖徳太子・行基・役行者の不在を問う試みは、ここまでで終わる。やや飛躍した論述となった憾は残るが、『今昔物語集』の構想との懸隔を意識化することが、『発心集』の〈仏法〉観に迫る捷徑となることは間違いない。それは、本朝仏法の全体像を描こうとする『今昔』の、よく考えられた構想・構成を比較対照とすることで、〈遁世者説話集〉を志向する『発心集』の特異性が明らかになるということでもある。『発心集』は、必

ずしも全体がかっちりと構造化された説話集とはいえないが、少なくともその巻頭部に示される説話集編成の所期の構想は、当時既に「権門」としての地位を確立していた、院政期における我が国の仏法のほぼ全体を相対化し、その彼方にいま一つの「仏法」として「遁世者仏教」「隠者仏教」を模索するものであったと言える。

このような立場に依る編者が、聖徳太子・行基・役行者について、格段の関心を示さなかつたのも無理はない。本稿の最初にも述べたように、『発心集』が讃仰する遁世者達は、「社会的存在としての仏教、つまり現実の寺社勢力」としての「仏法」を厭離し、遠国流浪あるいは山林隠棲を選んだ人々であったからである。本朝の「仏法」が、聖徳太子の創始以来、民間仏教・山岳仏教を含めて多様化しつつ、それぞれがしっかりと根付いていることの確認や、説話による史的展望・叙述といった行為は、編者にとってまことに（我が事に非ず）であつたに違いない。

### まとめに替えて——補足と展望

説話がないことの意味を考へることが、ときに不毛な空論に終わることは、よく承知しているつもりである。しかし、以上

にみたように聖徳太子・行基・役優婆塞の不在については、やはり一度は考へておく価値があつたと思う。『今昔物語集』との比較で明らかになつたように、『発心集』の構想は、本朝への仏法伝来と定着の過程を歴史的に展望したり、現在時に至る仏法の隆盛を逐一確認していくといった當為とは、かなり異質なものであつた。そのことは、『今昔』が同じく巻第十一で展開する〈寺院建立語群〉に重なる話柄が、『発心集』にほとんど見られないという事実とも呼応している。最後に、この点について簡単に事実を指摘し、あわせて次稿への展望を得ておきたい。

まず興福寺に例をとると、『今昔物語集』は巻第十一第十四話「淡海公、始造山階寺語」の末尾を、「惣ベテ仏法繁昌ノ地、此所ニ過タルハ無シ。本、山階ニ造リタリシ堂ナレバ、所ハ替レドモ山階寺トハ云也ケリ。亦、興福寺ト云フ、是也トナム」と結ぶ。ところが『発心集』は、巻頭の玄實説話で「山階寺」という古称を用いながら、その名前の由来を通じて興福寺草創の昔に思いを馳せるようなことはない。興福寺はいわば所与の前提として、玄資と対峙する形で立ち現れる。そこでは、寺の繁昌さえもが、「寺ノ交ヲコノマ」ない玄資から「世ヲ厭心」を引き出す契機とされているのである。

もちろん『発心集』にも「興福寺ノ方ニハ、人ヲホク居コソ

リテ、イミジウニギヤカナリ」といった記述がないわけではない。しかし、宗門の繁昌を言祝いでいるかに読めるこの一条は、卷第八十一話「聖梵・永朝、離<sub>レ</sub>山<sub>ヲ</sub>、住<sub>ニ</sub>南都<sub>ニ</sub>事」のもので、実は「心スナホナラヌ」「聖梵」という僧が、「人多キ所ニテ、思フサマニ成出<sub>ン</sub>事ハキハメテ難シ」と、良からぬ心を発す契機となったとされている。結局、この聖梵は「人ズクナニテ、物サビシキ様」に見えた東大寺の方を居所とするが、最期には「サマザマ罪フカキ相ドモアラハレテ」悪死を遂げたという。この話の場合、寺の殷賑の描写は「仏法繁昌ノ地」として賛辞の対象となるのではなく、却って愚かな僧の出世欲・打算といった悪心を引き出す機縁とされているのだが、このような説話のデイトールにも、『発心集』の〈仏法〉観が窺われることを、看過してはならないと思う。

次にもう一例、『今昔物語集』が〈寺院建立話群〉の冒頭に据える東大寺についてみても、基本的に事情は変わらない。前節で、行基に即してふれたように、『発心集』は院政期の修造や再建時の開眼供養については語るものの、それを機に天平の創建について説き及ぶようなことはない。また、他書にみられる「聖武天皇の御願争ふべき寺なければ」(平家物語)といったような表現を付して、国王勅願寺院として特別視することもないし、

その大仏を「コトニハ南浮第一ノ佛ト聞ル」(雑談集)と讃仰することもない。むしろ『発心集』の志向するところは、卷第七十話「阿闍梨実印、大仏供養ノ時、滅<sub>レ</sub>罪<sub>ヲ</sub>事」などに、端的に示されている。

四百字にも満たない短章の説話であるが、ここでは「貴賤道俗、カズシラズ参リ集ル」大仏供養の盛儀の中で、「大夫阿闍梨実印」という僧が「理趣分ヲコソ一遍」誦んだという一事によって「無始ノ罪障、悉滅」したことが、「勸進ノ聖」＝重源の夢を通して印象深く語られる。

東大寺再建に功を遂げた重源が、本話の生成・伝承にどう関わったかの詮索は措くとして、このような話柄の存在が、『発心集』の特徴を形作るものであることは疑えない。すなわち、遙か古代に〈王法〉の庇護下に確立した〈仏法〉が、東大寺再建によって確実に受け継がれ、本朝の仏法繁昌が約束されるといったことよりも、その開眼供養の儀を目の当たりにした群衆の中の一個人が、「ツネヨリモ信ヲコリテ」得脱することの方に重きをおいて語るのが、『発心集』という説話集なのである。

なお、この説話の三つ後に置かれた卷第七十三話「杵所権介成清ノ子、住<sub>ニ</sub>高野<sub>ニ</sub>事」についても、同じことが言える。説経『かるかや』の原型の一とも目される本話は、『発心集』中屈

指の長編であるが、その全ての発端は、尾張国の富者の嫡子だった主人公が「東大寺ノ大仏供養ノ年、二十三計ニテ、父母ニ相具シテ詣」でて、その時に「心ノ中ニツヨク道心」を発したことに始まる。この一話もまた、東大寺再興の晴の儀や、その後の寺の栄枯云々よりも、個人の発心を明らかに優先して語る点で、まさに『発心集』の説話と成り立てている観がある。<sup>(1)</sup>

それでも東大寺については、先に挙げた巻第二第二話に、白河院が永観を別当に抜擢し、寺の修理にあたらせたという話があり、〈王法〉と〈仏法〉の関係を考えさせる材料がないわけではない。ところが、そこで語られているのは、『今昔物語集』の伝える国家を挙げての一大事業としての寺院創建などは、ほど遠い内容のものとなっている。すなわち、余人の予想をよそに院の付嘱を受諾した永観は、「コトヤウナル馬ニ乗テ、彼コニキルベキ程ノ時料、小坊師ニ持セテ」といった異相で寺に通い、三年間てようよう修造を遂げるが、功成るやすぐに別当職を辞してしまふ。それは結局、院と永観が「能々人ノ心ヲ合セタルシワザノ様」だったというのだが、ここで〈治天の君〉と一僧徒との、個人的な関係に基づく東大寺復興が語られていることには、大いに注目しておきたい。

これは次稿以降での論及を予定するものだが、総じて『発心

集』において〈王法〉は、その主体とされる天皇あるいは上皇・法皇と、その働きかけを受ける僧・貴族・官人らとの間に成り立つ、個人としての関係性を軸に把握され、表現される傾向がつよいように思える。ことは編者の天皇・上皇観とも関わり、巻頭の玄寶説話以下、巻第五第八話「中納言顯基、出家、籠居、事」、或いは巻第六第三話「堀川院藏人所ノ衆、奉<sub>レ</sub>慕<sub>二</sub>主上<sub>一</sub>ヲ、入海ノ事」などなど、考察すべき説話は多岐にわたるが、この永観東大寺復興説話もその一環として、改めて検討・理解すべき事例となるだろう。白河院と永観以外、まったく余人の関知し得ないところで、個人と個人との信頼関係が成立し、それに全面的に依拠することで〈王法〉が〈仏法〉を支えたとする本話の伝承は、すぐれて『発心集』的な説話であるように感じるが、如何なるものであろうか。

以下、次稿以降では『発心集』の〈王法〉観の分析にも、歩を進めていかねばなるまい。

#### 【注記】

※テキスト——本稿で引用した本文は、以下の諸書に依った。

・『発心集』——大曾根章介・久保田淳編『鴨長明全集』所収「慶安四年板本」（貴重本刊行会／二〇〇〇年五月）。ただし「玄寶」「平燈」の人名表記については「神宮文庫本」や周辺史料を参

観して訂した。

- ・『今昔物語集』——池上洵一校注『今昔物語集 三』(岩波書店 新日本古典文学大系 35 / 一九九三年五月)。  
 ・『雑談集』——山田昭全・三木紀人校注『雑談集』(三弥井書店 中世の文学 / 一九七三年九月)。  
 ・『平家物語』——梶原正昭・山下宏明校注『平家物語 上』(岩波書店 新日本古典文学大系 44 / 一九九一年六月)。  
 ・『宝物集』——小泉弘・山田昭全・小島孝之・木下資一校注『宝物集 閑居友 比良山古人靈託』(岩波書店 新日本古典文学大系 40 / 一九九三年一月)。
- (1) 前田雅之『今昔物語集の世界構想』(笠間書院 / 一九九九年十月初版第一刷) 八三—八四頁。  
 (2) 黒田俊雄『寺社勢力』(岩波新書 / 一九八〇年) に依る。  
 (3) 黒田氏前掲書に依る。  
 (4) 『今昔物語集』と『発心集』の重なりについては、はやく篠瀬一雄氏の「今昔物語と発心集——直接的関係の否定——」(早稲田大学『国文学研究』復刊一七 / 一九五八年三月。後に、築瀬氏『発心集研究』 / 一九七五年五月に再録) に尽くされている。  
 (5) 前田氏前掲書九六頁。  
 (6) 藤本徳明『四天王寺』(角川書店『日本伝奇伝説大事典』 / 一九八六年十月) に依る。  
 (7) 三木紀人校注『方丈記・発心集』(新潮社新潮日本古典集成 / 一九七六年十月) 一四一頁頭注による。  
 (8) 『中外抄』上七八、久安四年(一一四八)五月三日条参照。  
 (9) 『今昔物語集』巻第十一「聖徳太子、建天王寺語第二十一」。
- (10) 『雑談集』第三卷「五 愚老述懐」。  
 (11) 『平家物語』巻第二「山門滅亡 堂衆合戦」。  
 (12) 注(9)に同じ。  
 (13) 『宝物集』巻第一「第八 子が宝」。  
 (14) 『今昔物語集』巻第十一「役優婆塞、誦持呪、驅鬼神語第三」。  
 (15) 『平家物語』巻第一「額打論」。  
 (16) 注(10)に同じ。  
 (17) 補足すると、これらの説話と似た発想は、神宮文庫本にのみ採られている。「新羅大明神、僧ノ発心ヲ悦ビ給フ事」にも指摘できる。こちらの説話では、山門と寺門の対立抗争の果てに、焼き払われた三井寺の現状を憂える僧に対し、夢の中に「イミジク悦ビタル御氣色」で顕現した新羅明神は、「法滅ノ菩提心ヲ起テ、無極ノ道心ヲ堅メタル僧一人有」ることを告げたという。この説話については「思想的に時代が下る」(新聞水緒氏)との指摘があり、後補の可能性が高いと考えられるが、たとえそうだとしても、『発心集』の構想と抵触する性格のものではなかったとは言えよう。——新聞水緒「流布本『発心集』成立試論」(説話と説話文学の会編『説話論集』第七集 / 清文堂一九七七年十月) 参照。

(たなか むねひろ・本学教授)